

## 大学生の箱庭制作の行動分析

遠藤 歩\*  
安保 英勇\*\*

これまで箱庭療法研究の対象は箱庭作品であり、その制作過程が論じられることはほとんどなかった。本研究では、箱庭制作行動を記述し、大学生の箱庭制作において、どのような行動が、どの程度生起しているのか、また、制作行動はどのようなタイプに分類されるのかを検討した。結果、10の行動カテゴリーが抽出され、各行動の頻度を示した。また、制作者のクラスター分析の結果、三つのクラスターに分類された。イメージとの関連から検討したところ、各クラスターは“イメージの解放-生成タイプ”、“イメージの生成タイプ”、“イメージの解放タイプ”といった制作行動の特徴が示された。制作行動に着目することは、制作者をイメージの流れ理解するため意義があると考えられる。

**キーワード：箱庭療法、行動分析、制作過程、青年期**

### 1. 問題と目的

Kalff によって心理療法として大成した Sandspiel (Sandplay Therapy) は、1965年に、河合隼雄により本邦に導入され、箱庭療法として定着した。箱庭療法研究において、その名にある制作された箱庭作品に対し関心が向けられるのは、自然な流れであった。箱庭作品は、意識と無意識の交差する領域に生じたイメージとして捉えられている。そこには、制作者の心的世界が具象的、直接的、集約的に表現され、時には、Jung のいうところの自己 (self) が顕現化することもあるとされている。こうした仮説の下、箱庭療法では、表現されたイメージに寄り添ってゆくことが本質的な接近法と考えられ (河合, 1982)、心理療法の過程で制作された一連の作品を、伝統的に分析心理学の観点から解釈してゆく形式の事例研究を中心に発展してきた。そして、箱庭療法の効果や制作者の心の変化について、肯定的な報告が積み重ねられ、制作者の心的世界を理解する方法として、箱庭作品について検討してゆくことは臨床的有用性があると見なされている。

ところで、コミュニケーションにおいて、非言語的表現が必要不可欠な情報を伝達していることが指摘されている (Mehrabian & Wiener, 1967)。心理療法におけるコミュニケーションでは、治療者は、クライアントの身振り手振り、表情、口調、沈黙などのさまざまな非言語的な手がかりを観

---

\*教育学研究科 博士後期課程

\*\*教育学研究科 准教授

察することが重要である (Bruch, 1974 鑑・一丸訳, 1978)。箱庭療法は非言語的な心理療法として位置づけられているものの、前述したように、関心のほとんどが箱庭作品に対して向けられてきた。しかし、制作者が非言語的に伝達しているのは箱庭作品だけではない。制作行動も非言語的表現であり、制作者の理解のために貴重な手がかりを与えてくれる。どんな作品かということは大事なことであるが、どのように作ったかということは、それと同様に重要なことである。箱庭療法は、玩具、砂といった道具を用いるため、それらを用いた制作過程においては、他の心理療法にない行動が生起する。この独特の行動は、注目に値するだろう。

基礎的研究においても、事例研究の流れを受け、使用された玩具数や種類、作品のテーマ、作品の印象評定値、作品の領域の特徴など箱庭作品の分析が中心に行われてきた。しかし、これらの分析と併せて、制作時間、初発反応時間、砂の使用の有無といった箱庭作品についてではなく、行動と関連する指標がいくつかの先行研究で取り上げられてきた。次に、これらの研究について概観しておく。

制作時間について、岡田 (1969) は“作るのに要した時間”と定義し、以後、他の研究においてもほぼ同様の表現で踏襲された。精神疾患 (岡田, 1969)、精神発達 (岩堂・奈比川, 1970; 岩堂・木村, 1971; 岩堂・木村, 1972; 岩堂・木村・三木, 1979; 岡田, 1981; 宮川, 2004)、性格 (木村, 1981) などの要因により制作時間に差があることが示されたが、制作時間の意味については十分に論じられてこなかった。先行研究では、必ずしも一貫した結果が得られておらず、制作時間は、一つの目安にはなるが、時間をどのように使ったかということの方が制作者の特徴を表しているとの指摘もされている (岩堂・奈比川, 1970; 斎藤, 1992)。また、“作る”ことの定義が曖昧であり、行動の特定化においても問題が残っている。

初発反応時間について、岡田 (1981) は、“教示してから作り始めるまでに要した時間”とし、幼児から大学生までを六つの段階に区切り検討した。結果、各段階に差はないこと、作り始めるのに30秒以上必要とすると述べている。その後、石垣・進藤・島田 (2000) は、“教示を行ったあと「では、よろしくお願ひします」と言ってタイマーをスタートさせた。タイマーをスタートさせてから、被験者が造形を目的に砂を触り始めるか置くことを目的に玩具を手にとった時まで時間”と修正し、成人60名を対象に調査した。そして、特に初発反応時間が5分以上の3名のインタビューを検討し、初発時間が長いことは、何らかの抵抗感を意味していると述べている。初発反応が生起するまでの時間の使い方については、制作時間と同様の問題が指摘できる。

砂の使用について、木村 (1981) は、“砂に手を触れ、効果的に使用するか否か”とし、大学生に箱庭制作とロールシャッハ・テストを実施し、砂に手を触れ、なんらかの形で砂を使用した群と、使用しなかった群の二群に分け、ロールシャッハ反応を検討した。その結果、砂の使用は精神活動の活発さや生産性、イメージの量と関係していると述べている。また、木村 (1982) は、Y-G 性格検査と各下位尺度 (12因子) についても同様の方法で検討した。その結果、砂の使用は、情緒の安定や社会適応といった分野に関連深いと述べている。砂の使用について意義深い考察ではあるものの、その定義から行動の特定化には問題があり、また、砂をどのように使用したかという制作過程を考慮

せず、“砂を使用したか否か”という二分法で制作者の特徴を捉える点には修正が必要と考えられる。

こうした従来の基礎的研究は、診断的・発達的な制作者の特性と、制作行動の所産としての作品の特徴や、上述した制作時間などとの相関的関連性を分析し、その作品の特徴や制作時間などが、診断的・発達の指標として有用性を持つかを議論することが中心であった。しかし、こうした方法では、制作者の行動過程や心的過程を客観的に理解し、説明することが困難であり、制作過程に焦点を合わせた研究(on-line study)の必要性が指摘されている(佐藤, 1998)。

心理療法の場において、クライアントの非言語的表現には多様なメッセージが含まれており、その重要性は認識されているが、箱庭療法では、箱庭作品が重視され、制作行動に焦点を当てられることはなかった。基礎的研究では、制作時間、初発反応時間、砂の使用の有無など制作行動に関連する指標について、僅少ではあるが検討されてきたものの、箱庭制作過程で生じられる行動はほとんど取り上げられて来ず、どのような制作行動が生起するかも明確にされていない。また、先行研究の記述から行動の特定化は難しいこと、時間や砂をどの程度使ったのかという制作過程は考慮されていないなどの問題がある。非言語的表現に注目することで、クライアントをより理解できるように、制作行動に注目することで、制作者をより理解できるようになるのではないだろうか。

そこで、本研究では、箱庭の制作過程を考慮し、どのような制作行動が生起するかを探索的な観察から記述し、それに沿って大学生の箱庭制作の行動分析を行う。そして、大学生の制作行動についての基礎資料を提出するとともに、制作行動の意義を考察することを目的とする。本研究は、箱庭の制作行動に心理学的観点から焦点を当てたパイロット・スタディとして位置づけられ、続く研究の予備調査を兼ねている。

## 2. 方法

**箱庭制作協力者**<sup>1</sup> 大学生・大学院生31名(男性16名、女性15名、 $M=22.35$ 歳( $SD=1.98$ 歳); 学生群)。箱庭療法に関する専門的な知識、および箱庭制作経験を有していない人を対象とした。

**質問紙** 学生群であっても精神状態には個人差がある。精神的に健常な大学生を対象とするために、精神疾患の鋭敏なスクリーナーであるK10(古川・大野・宇田・中根, 2002)、および精神神経症患者やうつ病患者の把握に有効なState-Trait Anxiety Inventory(STAI)の特性不安(肥田・福原・岩脇・曾我・Spielberger, 2000)を実施した。

K10は、10—50点の範囲を取り、精神疾患の検出が期待できる25点をカットオフとして用いた。男性の得点は14.75点( $SD=3.44$ 点、範囲11—20点)、女性の得点は14.67点( $SD=3.75$ 点、範囲10—23点)、全体の得点は14.71点( $SD=3.53$ 点、範囲10—23点)であった。STAIの特性不安尺度は20—80点の範囲を取り、高特性不安(標準得点55以上)とされる男性53点、女性50点をカットオフとして用いた。男性の平均素点は40.75( $SD=6.58$ 点、範囲30—48点)、女性の平均素点は40.20( $SD=5.81$ 点、範囲30—48点)であった。

**手続き** 本調査は、箱庭療法用具が備わっている医療機関の一室で実施した(Figure1)。箱庭制

作は個別に行い、すべて第一筆者が立ち会った。本調査について説明し、同意が得られた場合、K10、および、STAI の特性不安尺度を実施した。そして、上記の基準が該当した協力者に対し、“ここにある玩具や砂を使って、砂箱に何かを作ってください。作り終わったら教えてください。それでは、始めてください。”と教示し、箱庭を制作してもらった。この開始の合図から、協力者から終わりの合図がされるまでを制作時間とし、時間制限は設定しなかった。作品完成後、協力者の体調の確認、作品の振り返りを行った。制作過程は、制作者の同意を得た上で2台のビデオカメラで撮影した。

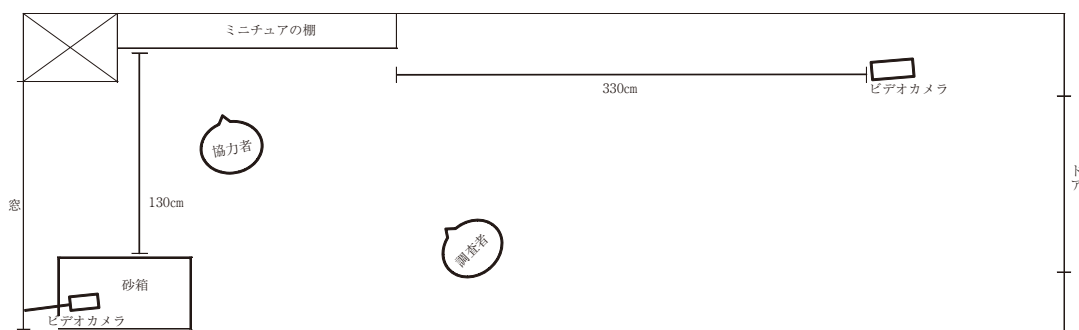


Figure1 箱庭制作実施状況

1台は、ビデオカメラと分からないように覆い、制作行動の想定範囲の外、約330cmの位置に設置した。もう1台は、砂箱の上方、床上230cmの位置に、窓からアームを伸ばし、設置した。制作中、第一筆者は箱庭療法の基本的態度に準じ、制作の流れを妨げないように受容的、共感的であろうと努めた。

**倫理的配慮** 協力者に対し、個人情報を保護すること、調査は強制でないこと、いつでも制作を中止してよいこと、中止による不利益はないこと教示し、同意を得て実施した。また、体調の不調を訴えた場合は、精神科医、臨床心理士が対応するように準備を整えた。

**箱庭の制作行動カテゴリーの作成** 撮影した映像から、制作に関係する行動を記述した。そして、類似性の高い行動や生起率の低い行動は、より包括的に記述するか、除外した。また、砂に触れた後“手を擦り合わせる”のような、他のより上位の制作行動(例えば、“砂箱の方を向く”)に付随的に生起する行動は除外した。結果、基本的な制作行動は、“視覚探索”・“接触探索”・“ミニチュアの選択”・“砂箱への移動”・“棚への移動”・“砂箱の方を向く”・“置く”・“置き直す”・“砂の使用(大)”・“砂の使用(小)”から構成されていた(Table1)。

Table1 箱庭の制作行動カテゴリーの操作的定義

制作行動	操作的定義
視覚探索	他カテゴリーの行動が同時に生起していない状態で、2秒以上砂箱外のミニチュアの方に顔を向ける。
接触探索	砂箱外のミニチュアを保持/接触しつつ、そのミニチュアの方に顔を向ける、および、選択したミニチュアを砂箱外に置く。
選択	砂箱外のミニチュアを保持し、そのミニチュアを箱庭外に置く行動を除く、他カテゴリーの行動が生起した場合。
砂箱へ移動	ミニチュアの棚付近から砂箱内にミニチュアを置ける、または、砂に接触できる範囲まで身体を移動し、顔を砂箱の方に向ける。
棚へ移動	砂箱付近から棚にあるミニチュアを保持、または接触できる範囲まで身体を移動し、顔を棚の方に向ける。
砂箱の方を向く	他カテゴリーの行動が同時に生起していない状態で、2秒以上砂箱の方に向ける。
置く	ミニチュアを砂箱内に位置させ、制作者の力を加えずにとどまった状態にする。また、意図せずミニチュアの状態が変化した際に、ほぼ元の状態に戻す。
置き直す	砂箱内のミニチュアを保持/接触し、砂箱内/砂箱外に移動させる。
砂の使用(大)	砂を、動かす/かき分ける/盛り上げる/寄せる/掘るなど形状を大きく変える。
砂の使用(小)	砂を、つまむ/触れるなど感触を確認する、または、軽く叩く/払う/均す/撫でる/除けるなど形状を整える。
補足1	顔の向きとは、顔の中心線(両目の中心と鼻の頭を結んだ線)が向いている方向とする。
補足2	保持するとは、ミニチュアを手取る/握る/抱える/手元に置くなどの行動とし、接触するとは、触れる/押すなどの行動とする。

**行動分析** 作成したカテゴリーに沿って、学生群の行動分析を行った。ビデオ映像から、5秒を1インターバルとする部分インターバル記録法を用い、観察された全制作時間を対象とし、分析した。部分インターバル記録法は、インターバルの間に生起している行動をコーディングする評定方法(Alberto & Troutman, 1999 佐久間・谷・大野訳, 2004)で、継続的で、高頻度な行動でも、実際の生起した回数に比較的近似した値を算出できるため採用した。男性の平均制作時間は22分40秒( $SD = 6分49秒$ 、範囲:7分58秒—37分21秒)、女性の平均制作時間は29分3秒( $SD = 11分10秒$ 、範囲:16分6秒—47分15秒)、全体の平均制作時間は25分17秒( $SD = 9分26秒$ 、範囲:7分58秒—47分15秒)であった。各制作者の全インターバルから、各行動の生起率を算出し、分析を行った。

行動分析にあたり、全制作時間の20.1%のデータについて、第一筆者とビデオ分析のトレーニングを受けた協力者1人によるコーディングの一致率を調べ、その信頼性を検討した。Cohenの $\kappa$ 係数により一致率を算出した結果、 $\kappa = .80$ であり、十分な信頼性が確認された。この結果を受け、データのコーディングは第一筆者が単独で行った。

### 3. 結果と考察

**行動の頻出頻度** 制作行動に占める、各行動の出現数の平均頻度は、“視覚探索”は、男性27.9%、女性22.3%、全体25.2%、“接触探索”は、男性7.9%、女性12.8%、全体10.2%、“選択”は、男性10.4%、女性11.6%、全体11.0%、“砂箱への移動”は、男性7.0%、女性6.4%、全体6.7%、“棚

への移動”は、男性6.7%、女性6.1%、全体6.4%、“砂箱の方を向く”は男性が11.9%、女性が11.5%、全体11.7%、“置く”は、男性12.5%、女性12.8%、全体12.6%、“置き直す”は、男性7.8%、女性9.4%、全体8.5%、“砂の使用(大)”は、男性4.4%、女性2.8%、全体3.6%、“砂の使用(小)”は、男性3.6%、女性4.5%、全体4.0%であった (Figure2)。

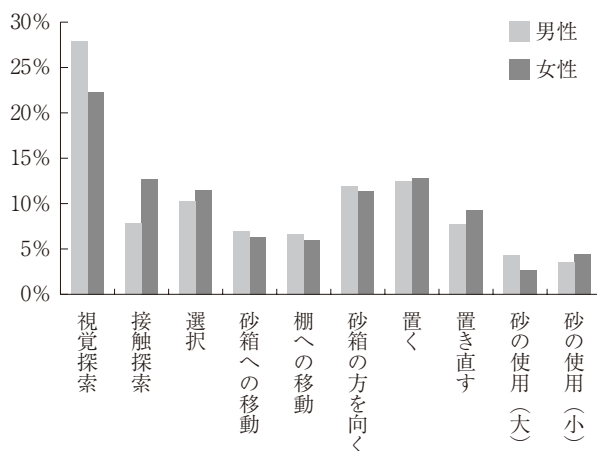


Figure2 箱庭の制作行動生起頻度

箱庭作品が制作者の内的世界のイメージであると考えられるならば、箱庭制作とは、内的世界のイメージの解放とイメージを作品に生成する過程といえる。制作行動に当てはめれば、大まかに言って、行為として作品を制作していない“視覚探索”・“接触探索”・“選択”・“砂箱の方を向く”の行動はイメージの解放と強く関連し、実際に箱庭を制作している“置く”・“置き直す”・“砂の使用(大)”・“砂の使用(小)”の行動はイメージの生成と関連が強い行動と考えられる。イメージの解放と関連する行動の生起頻度は全体で58.3%、イメージの生成と関連する生起頻度は全体で28.7%であった。すなわち、学生群は、実際にミニチュアを置いたり、砂に触れたりするといった行動より、ミニチュアを選んだり、見ている時間の方が長いことを示している。学生群であれば、イメージの解放は、ある程度、自我の統制下に置かれていると考えられる。表現することは、自我の統制を緩めてゆく必要があるため、イメージの解放のための行動が多く占めたのではないだろうか。これらをより詳細に検討するには、自我の発達水準が異なる、さまざまな年代の制作行動を比較してゆく必要があるだろう。

**クラスター分析とその特徴** 上記の結果は各行動を捉えることはできるが、制作者を全体的に捉えていない。そこで、制作者の階層クラスター分析(平方ユークリッド距離による ward 法)を行った。分析に際しては、各制作者のそれぞれの制作行動を z 得点に変換して行った。その結果、解釈の可能性から3つのクラスターに分類することが妥当であると考えられた。第1クラスター (CLU1) は13人(男性9人、女性4人)、第2クラスター (CLU2) は9人(男性4人、女性5人)、第3クラスター

(CLU3)は9人(男性3人、女性6人)であった。

各クラスターの行動の特徴を検討するために、1要因の分散分析を行った。分析に際しては、比率データのため、角変換を行った数値を用いた。その結果、“視覚探索”( $F(2, 28) = 5.97, p < .01$ )・“接触探索”( $F(2, 28) = 5.34, p < .05$ )・“選択”( $F(2, 28) = 7.68, p < .01$ )・“砂箱へ移動”( $F(2, 28) = 18.65, p < .01$ )・“柵へ移動”( $F(2, 28) = 15.00, p < .01$ )・“置く”( $F(2, 28) = 5.40, p < .01$ )・“置き直す”( $F(2, 28) = 3.88, p < .05$ )で有意な主効果が認められた。これらに対し、Scheffe法による多重比較( $p < .05$ )を行った。“視覚探索”において $CLU1, CLU2 < CLU3$ 、“接触探索”で $CLU1 < CLU3$ 、“選択”で $CLU2 < CLU1, CLU3$ 、“砂箱へ移動”で $CLU2, CLU3 < CLU1$ 、“柵へ移動”で $CLU2, CLU3 < CLU1$ 、“置く”で $CLU3 < CLU1$ 、“置き直す”で $CLU1 < CLU2$ であった。

以下に、それぞれのクラスターについて検討してゆく。第1クラスターの特徴は、“選択”・“砂箱へ移動”・“置く”・“柵へ移動”というもっとも中核的な行動を中心に構成され、また、“接触探索”・“置き直し”という吟味、修正といった行動は少なかった。これは、箱庭に表現されるイメージの解放と箱庭制作の流れがスムーズなためと思われる。第1クラスターの制作者は、“イメージの解放—生成”タイプと考えられる。

第2クラスターの特徴は、“置き直し”という砂箱で生起する修正や調整といった行動が多く、また、“視覚探索”・“選択”・“移動”は柵付近で生起する行動は少なかった。こうした修正や調整は、箱庭制作においては、“ぴったり感”(後藤, 2004)という、適切な象徴化を模索する一行動として知られており、イメージを作品に生成する行動と思われる。第2クラスターの制作者は、“イメージの生成”を中心とするタイプと考えられる。

第3クラスターの特徴は、“視覚探索”・“接触探索”・“選択”といった柵付近での行動が多く、また、“移動”・“置く”という行動は少ない。前述したように、ミニチュアの選択に関わる行動は、どのような作品を作っていくかというイメージの解放と関連していると考えられる。第3クラスターの制作者は、“イメージの解放”が中心のタイプと考えられる。

箱庭療法の特徴である砂については、Figure2で示すように砂の使用が制作行動に占める頻度は小さく、各クラスターを特徴づけなかった。木村(1982)が述べるように、情緒の安定や社会適応と深く関連しているのであれば、健常の学生群では効果が見えにくかった可能性がある。砂の使用の意義についてはさらなる検討が必要であろう。

#### 4. 今後の課題

本研究は、箱庭の制作行動を記述し、大学生の箱庭制作において、どのような行動が、どの程度生起しているのか、また、制作行動はどのようなタイプに分類されるのか検討した。結果、10の行動カテゴリーが抽出され、各行動の頻度を示した。また、クラスター分析の結果、三つのクラスターに分類された。箱庭作品が制作者の内的世界のイメージと位置づけられていることを踏まえ、イメージとの関連から、箱庭制作者は、“イメージの解放—生成”タイプ、“イメージの生成”が中心のタイプ、“イメージの解放”が中心のタイプに分類されると考えられた。制作行動は、制作者をイメー

ジの流れ理解するため重要な視点であることが示唆された。

箱庭療法研究において、制作行動をテーマに扱った研究はこれまでなく、箱庭作品の制作行動を包括的に捉えたことが、本研究の意義である。しかし、探索的な研究であり、多くの課題がある。直近の課題について、以下の二点が挙げられる。

第一に、各行動の頻度や制作行動のタイプと、制作者の心的特性との関連について、臨床群をはじめ、さまざまな対象の制作行動を分析する必要がある。第二に、本研究は制作過程で生じた各行動の生起頻度は反映しているが、箱庭をどのように作ったか、という点が不十分であり、制作過程を反映した分析をする必要がある。そして、これらの課題は、事例研究と対応させ、詳細に検討することも必要であろう。

### 【付記】

本研究の実施にあたり、箱庭制作にご協力してくださった皆様に厚く御礼申し上げます。また、本研究をご支援いただきました、A クリニックの精神科の先生をはじめ、二人の臨床心理士の先生、スタッフの皆様に感謝申し上げます。

### 【註】

1 制作行動カテゴリーの作成にあたって、精神科クリニックに通院している患者の箱庭制作の行動も参考にした。

### 【引用文献】

Alber, P. A. & Troutman, A. C. (1999). *Applied behavior analysis for teacher*. 5th ed N. J.: Prentice Hall.

(アルバート, P. A. & トルトマン, A. C. 佐久間 徹・谷 晋二・大野 裕史(訳) (2004). はじめての応用行動分析 第2版 二弊社)

Bruch, H. (1974). *Learning psychotherapy: rationale and ground rules*. Cambridge: Harvard University Press.

(ブルック, H. 鏑 幹八郎・丸 藤太郎(訳編) (1978). 心理療法を学ぶ 誠信書房)

古川 壽亮・大野 裕・宇田 英典・中根允文(2002). 一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究 平成14年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業)心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究 研究協力報告書 < <http://mental.m.u-tokyo.ac.jp/h14tokubetsu/%E5%88%86%E6%8B%85%E7%A0%94%E7%A9%B6%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B822.pdf> > (2011年5月8日)

後藤 美佳(2004). 箱庭表現に伴う「ぴったり感」のPAC分析 箱庭療法学研究, 16(2), 15-29.

肥田野 直・福原 眞知子・岩脇 三良・曾我 祥子・Spielberger, C. D. (2000). STAI マニュアル 新版 実務教育出版

岩堂 美智子・木村 晴子(1971). 箱庭療法に関する基礎的研究(その2)——知的優秀児の箱庭表現をめぐって—— 大阪市立大学家政学部紀要, 19, 217-227.

岩堂 美智子・木村 晴子(1972). 箱庭療法に関する基礎的研究(その3)——3・4・5歳児の箱庭—— 大阪市立大学家政学部紀要, 20, 175-184.

岩堂 美智子・木村 晴子・三木 真代(1979). 箱庭療法に関する基礎的研究(その4)——中学生の箱庭表現をめぐって—— 大阪市立大学家政学部紀要, 27, 199-205.



- 岩堂 美智子・奈比川 美保子(1970). 箱庭療法に関する基礎的研究 大阪市立大学家政学部紀要, 18, 183-192.
- 石垣 明美・進藤 貴子・島田 修(2000). 青年中年高年の箱庭における初発時間, 制作時間および使用玩具総数——その年齢差と性差について—— 川崎医療福祉学会誌, 10(2), 243-248.
- 河合 隼雄(1982). 箱庭療法の発展 河合 隼雄・山中 康裕(編)箱庭療法研究1 誠心書房 pp. vii - xviii.
- 木村 晴子(1981). 箱庭表現とロールシャッハ反応 ロールシャッハ研究, XXIII, 87-102.
- 木村 晴子(1982). 箱庭療法に関する研究——Y・G性格検査との関連—— 心理測定ジャーナル, 18(2), 12-16.
- Mehrabian, A., & Wiener, M. (1967). Decoding of inconsistent communications. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 109-114.
- 宮川 貴美子(2004). 高齢者による箱庭制作の試み 箱庭療法学研究, 17(2), 33-50.
- 岡田 康伸(1969). SD法によるサンドプレイ技法の研究 臨床心理学研究, 8, 151-163.
- 岡田 康伸(1981). 箱庭療法に関する基礎的研究——年齢差を中心として—— 天理大学学報, 130, 10-17.
- 斉藤 紫をん(1992). 不登校児の箱庭表現に関する数量的研究 箱庭療法学研究, 5(1), 39-50.
- 佐藤 静(1998). コラージュ療法の基礎的研究——コラージュ制作過程の分析—— 心理学研究, 69, 287-294.

## Behavior analysis of creating Sandplay work

Ayumu ENDO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Hideo ANBO

(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

In most previous studies on Sandplay therapy, the subjects have been Sandplay works themselves and their creating processes almost have not been discussed. This study examined what actions arise and how often they occur in creating Sandplay work by students ( $N = 31$ ). As a result of the investigation, 10 categories of behavior are extracted and the frequency of each category is measured. Cluster analysis revealed 3 types of ways of creating Sandplay work: In connection with image, "Release - formation type", "Release type", and "Formation type". Considering behavior of creating process of Sandplay works is significant to understand the sequences of image.

Key words : Sandplay therapy, Behavior analysis, adolescents, processes of creating